

いくつかの記録の狭間に落ちていく
人の声を拾いながら
慶応三年の陸奥の背の
すでに一五一年の影たち
が燃える静かな刻限が近づき
明治二八年の大陸への貧しき傷の
北上する足と南下する足の吃音
の重なりは届かぬ野だと
明治三八年の波立ちの
いつまでも消えない朽ちかけた
無数の影たちに呼ばれ
大正七年の崩れ行く体の
失われ続ける一瞬の目の内側の萌す
あわい光の粒を包む
大正八年の蔓延する病の
いくつかの記録の淀む
彼方に呼ばれる指の動きに沿う
大正一二年の燃え続ける人たちの
ならば一つずつの脆い思い出
は誰かの内の地平の輝きへ
昭和五年の浮遊する足首たちの
一五一年はまだ終わらずに色褪せ
永らえる人の息こそ
昭和二〇年の目の裏の発光の
啄まれていく皮下出血に
なりもう消えた唇の畔に留まる
平成二三年の還らない水の絡まりの
薄れる背中の連なりを追いながら
揮発する爪の陥没だ
令和二年の新しい死者たちの